

平成二十四年四月十日発行
皇學館論叢第四十五卷第二号 抜刷

秦恒平「慈子」論ノート

—揺らぐ慈子—

永
栄
啓
伸

皇學館論叢 第四十五卷第二号
平成二十四年四月十日

秦恒平「慈子」論ノート

—揺らぐ慈子—

永 栄 啓 伸

□ 要 旨

この作品は、秦恒平が太宰治賞を受賞する以前に『斎王譜』と題されて自費出版され、受賞後、大幅に改稿されて、単行本として出版された。そういう経緯をもつ作品だけに、初期の秦文学の特徴が出ていると思われる。作者自ら、早くから言うように、〈絵空事〉〈身内〉〈死なれる〉〈魂の併存〉など、秦文学で大きな役割を果たしているキーワードが、漱石の作品から得られた着想である点を検証しながら、現世の関係性を超えたところに成立する〈絵空事〉と呼ばれる世界（イデア的な世界）の「私」と慈子の純粋な愛が、現実の世界（リアルの世界）に侵食され、崩壊してゆくとき、二人はどう立ち向かうのかを考察した。慈子の父母や複雑な家系の遠い時間の累積が、「徒然草」の成立考を背景にして、兼好・斐子内親王、朱雀光之・肇子、「私」・慈子、の哀しい愛に重ねられている物語の重層構造にも注目しながら、慈子の生き方を検討した。

□ キーワード

秦恒平 慈子 来迎院の世界 絵空事 身内観

(1) 漱石『こころ』の受容

かつて小森陽一が『こころ』を生成する『心臓』(成城国文学) 昭和六〇・三) を書いて、その小説の末尾の読みとして、「私」と「奥さん」との共生を指摘した。翌昭和六十一年に、秦恒平は戯曲「心——わが愛」(俳優座公演) を書き、二人の結末として結婚を描いた。のち、さらに論旨を明確にした「漱石作『こころ』の心見——「静」と、静かな心と」(新潮) 平成四・九) を発表した。テキスト論が研究界を揺るがせていた昭和六十年代、当然その読みをめぐって、三好行雄が反論して、(こころ) 論争とも言うべき応酬が行われたことは周知のところである。

七年後、小森は「私」という(他者) 性」(文学) 平成四・一〇) で、ことさら結末だけが取りあげられ、論じられた不満を記して、本来の主題を詳しく述べている。その冒頭に次のような指摘がある。

その多くは、論の結末近くにある「つきつめられた孤独のまま、(奥さん) ——と——共に——生きること」という記述によって喚起される、後日譚をめぐっての、「深読みに過ぎる」、ないしは「小説それ自体から逸脱した読み」という批判であった。また先の指摘が同じ時期に発表された秦恒平の戯曲『こころ』と重ねられ、あたかも私、(奥さん) と「私」の結婚の可能性を指摘したかのような誤解も生み出されていった。

冒頭にふれた小森の論は、¹⁾「故郷を棄てた「先生」は、結局「奥さん」「御嬢さん」との間で擬似的な「家族」関係を構成しなければ生きていけない」人であり、「奥さん」と「私」はこのような関係性にとらわれない「自由な人と

人との組合わせを生きる」という意味で〈共生〉を指摘したものであったと言う。しかし〈共生〉とは何か、と思う。一緒に住み、一緒に生きることではないのかと思う。文脈上では、夫婦関係はもちろん、あらゆる家族関係の成立が否定されて、事実の特定をすり抜けようとする論理展開の周到さを感じさせる。とは言え、〈奥さん〉——と——共に——生きる」という物言いには、よそよそしく生きる二人の姿を想起することはできない。作品の構成を、「先生」の遺書を汽車の中で読み、この世の中になつた一人残された「奥さん」と出会ってから、今その遺書を自らの手記の中に引用しようとするまでの「私」が、生きてきた生の過程を示していることだけはまちがいない」（傍線引用者）と論断するとき、傍線部の内実は、「先生」の死後のかかりの時間を、「私」と「奥さん」が無縁に過ごしたはずがないことを示唆している。言外に、小森は、結末を「奥さん」と「私」の世界を重ね合わせることを想定しながら、しかしあくまで慎重に「これ以上の解釈はしない」と踏みとどまる表現をしたものと推測される。なぜなら、続けて、孤独を自覚し、他人とは血と肉で繋がろうとしていた「私」が、「先生」と呼びかけた人を失った「奥さん」と、「頭」でなく「心臓」でかわつていた「奥さん」と出会ったとき、選ばれるべき「道」と「愛」は、「K」と「先生」のそれを徹底して差異化するものであったはずだ」と記すとき、それはまさに「先生」のような擬似的な家族関係から、真の「精神と肉体を分離させることなく」築かれるべき共生、への転換を意味することになるからである。

しかし、この小森論が、秦という結末という結末への「可能性を指摘した」と考えるのは、たしかに「誤解」だったと言えよう。偶然にも、同じ主旨の内容が二人によって、まったく同じ時期に書かれていたからである。秦はすでに昭和六十年一月、限定豪華本『四度の瀧』（珠心書肆）の「跋——心」で次のように記している。長い引用になるが、秦文学の根幹に関わる思念が読み取れるので厭わずに引いてみたい。

余儀ない遠くに「世間」がひろがる。その中で日々数え切れない「他人」と出会ってきた。すべて親子であれ何であれともあれ生じた人間関係の一切を、親疎の区別なく、私は「他人」と思う。人の世とは他人の世の意味だろう。だが、人交わりすべてが「他人」と「他人」とばかりでは「淋しくて」生きかねると、例えば夏目漱石『心』の「先生」は考えていた。私もそう思った。それで「他人」の中から「身内」を求めた。『心』の「先生」が「私」を、「私」が「先生」を求めたようにである。「俱二一処二会フ」確信があつてのあの「先生」は先に死に、「私」もまた係累のすべてをうち捨てて、未亡人となつた「奥さん」のもとへ走つた。「俱二生き、俱二死ヌ」べき一体の「身内」として「先生」は若い二人をこの世に残した。愛の小説でもある『心』の未来は、いや『心』のかく書かれてある現在進行形は、必ず、こう読まれねばならない。それでこそ「奥さん」ひとりを残して何故に……という、若い読者たちのこそぞつて挙げる「先生」への不満や不審にも正しく応えられる。本文をこまやかに読めばその伏線は枚挙にいとまないのに、『心』が発表されてこのかた七十年、一人としてこういう『心』の読みが書けなかつたのは、作者と作品の大きな不幸であつた。とりかえしのつかぬ罪を背負つた「先生」は、死んで「私」に化り変り、「妻」と「俱生俱死」の本望を生き直すのである。現に「遺書」が公開されているのは、すでにそういう暮らしが、「身内」の愛が、子供すら生れて事実成立つてゐるからだ。

当該部分は、「漱石作『こころ』の心見」にも引用されている。もちろん、本論の主旨は「こころ」を論じることではなく、初期の秦恒平の文学、とりわけ「慈子」が、かなり深い部分で漱石の影響下にあることを確認することである。想像すれば、生後まもなく母乳不足のために里子に出され、二才から九才まで塩原家の養子となつた、言わば大人の都合に翻弄された漱石の幼少時代の経歴が、秦恒平自らの〈貰い子〉としての生い立ちに重ねられ、早くから作品

に慣れ親しんだものかもしれない。また、卒業のとき、一つ年上の恋する人が贈ってくれた本が『心』であつたと熱く述懐もしている。⁽²⁾

初期作品の特徴である、他人と身内という着想が、漱石の作品、とくに『こころ』から得たらしいこと、さらに言えば、世間の規範に縛られた人間関係と絵空事としての愛の二層構造が、『それから』の代助の言う「矛盾かも知れない。然し夫は世間の掟と定めてある夫婦関係と、自然の事実として成り上がった夫婦関係とが一致しなかつたと云ふ矛盾なのだから仕方がない」といった言葉に発想が認められること、また柄谷行人の「意識と自然」⁽⁴⁾が指摘するように、漱石の断章「二個の者が same space ヲ occupy スル訳には行かぬ」の一節から、「漱石は人間と人間の関係を意識と意識の関係としてみるよりも、まず互いが同じ空間を占めようとして占めることができないうふうな、なまましい肉感として、いいかえれば存在論的な側面において感受していたのだ」という発想が、『戯曲 こゝろ』(湖の本⁽²⁾)において、夏の房州の海水浴場で、「世間」を広い海に例え、その中に無数に存在する「島」に人が一人ずつしか立てない孤独、その「島」に二人で立つという愛の幻想、などの場面に秦恒平流に解釈されて深められて生かされていると見てよい。あるいは『門』にも見られる〈父母未生以前の本来〉という観念を指摘してもいいだろうか。三枝和子の随筆「聖書」の話⁽⁵⁾によって〈ぶもみしよういせん〉と読むことを知ったのだが、三枝は仏教のもつ「血縁を否定した場所に一人の人間において把握する考えかた」と記している。

絶対の孤独と愛、これが秦文学の出発点と言えよう。それは家族関係を信じられないところに発し、わが〈身内〉を〈他人〉の中からさがすという、いわば恋や愛の内発的行為そのものである。

Kの自殺の原因は、岸田俊子の言うように、一途な「道への挫折でもなければ失恋でもなく、友を失った寂しさ」であつたのかも知れない。それも、裏切りが、無二の親友であるはずの「先生」のエゴイズムに起因するという事実

は、絶望的にKを突き放した。しかし「明治の精神」に殉じた、と言い、Kを裏切ったからだと言われる。「先生」の自死は、「作者の願望のあらわれ」であると柄谷行人は評し、「友人を裏切った罪意識が、あるいは明治が終ったという終末感が、この作品をおおっている暗さや先生の自殺決行に匹敵しない」と述べる。⁽⁷⁾

秦恒平は「先生」の自殺については、「奥さん」が死んだ事実は認められず、しかも「私」は「先生の遺書」を公開しているのだ。何が、それを、可能にしているのか（「こころ」の心見）と問い、「奥さんを残して、私の出現と存在に心安んじて、やっとやっと自決することが出来たのである」（心の問題）と推理している。

以下、それらの問題点を踏まえながら、漱石の『こころ』を、少なくとも『こころ』がはらむ問題を取り込んだはずの、作品『慈子』を読んでみたい。

(2) 作品の楳田構造について

作者の自解（湖の本⑨ 慈子（上）」の「作品の後に」）によれば、この作品の成立過程は、昭和三十八年に「徒然草」に関心を抱き、東京大学国文科研究室の書庫に通って文献をノートにとり、まず論文として「徒然草の執筆動機について」（『同志社美学』一二、一三号 昭和四一・一〇、昭和四二・三）を仕上げた。その構想をもとに、まず『斎王譜』が書かれ、昭和四十一年十月に菅原万佐の名で私家版として出版された。さらにそれに徹底的に手を加え、改題して、昭和四十七年四月に書き下ろし小説として筑摩書房から出版されたのが『慈子』である。したがって、作家以前の要素を多分に含み持つこの作品は、初期の秦恒平を語るうえで欠かせないものと思われる。

作品構造について、野呂芳男は『集英社文庫』⁽⁸⁾の解説で次のように述べる。

作品「清経入水」で昭和四十四年に大宰治賞を受賞した作家秦恒平氏の世界は、過去と現在との二焦点を持った楕円のように見える。「慈子」には兼好法師の「徒然草」に対する作者独自の解釈と、小説の主人公たちをめぐる今の世界とが相互に緊張関係を保ちながら、しかも渾然たる調和を作りあげているが（中略）「慈子」における二焦点、どのようにして兼好法師が「徒然草」を書き始めるに至ったかの解釈と、当尾宏・朱雀慈子の織り成す人生絵模様とは、この小説の楕円形式を形造っているのであるが、その形式は内容と切っても切れない関係にある。

この解説は、作者の私家版全集ともいふべき『湖の本⑩ 慈子（下）・月皓く・底冷え』にそっくり再録されている。ここでは、そのすぐれた解説を手がかりに、若干の考察を加えて読んでみたいと思う。

まず、第一の「どのようにして兼好法師が「徒然草」を書き始めるに至ったか」は、京都泉涌寺にある来迎院の朱雀光之先生が生前、独り言のように問われたことに始まる。主人公の「私」（当尾宏）は、十年前、高校二年生のとき、ふと訪れた来迎院で、先生と慈子と、先生のいここである、お利根さんに出会う。慈子は当時九才であった。父親の女性問題に関する家庭の煩わしさとで悩んでいた「私」は、「来迎院へいつてしまえばすべて世外のこととなった。生まれる以前からの家のようであった」と感じ、いつも暖かく迎えてくれるこの場所が、本来の自分の居場所であると思い、足繁く通い始める。「私」にとって、来迎院の世界は、世間とかけ離れた別世界であり、他者の侵入によって汚されたくない清い世界になっていった。だから現実の女性像を象徴するような岩田馨子に、慈子と一緒の姿を知られたとき、「私」は「小さな息を呑んだ」。それは他人には見られたくも知られたくもない別世界であった。その気

持ちは次のように記される。

〴〵隠す〴〵というより〴〵守る〴〵という気もちで、先生やお利根さんのこと、朱雀慈子のことを固く秘した。来迎院の人たちはこのひたむきな姿勢を揺るがそうとは決してしなかった。現実の煩いから離れて愛だけを守るというのは絵空事なのである。絵空事には絵空事にしかない不壊の値があることを先生が、慈子が、私におしえた。

主人公は来迎院の人たちに、いわゆる〈父母未生以前の本来〉を感知しえたのである。その世界とは、ほぼ同時期に書かれた「畜生塚」⁹のなかで「今の私の生活はすべて旅さきの生活であり、家庭は仮の宿です。私はいつか、死ぬという手段である本来の家（この本来という言葉はよくいう父母未生以前の本来です）へ戻り、本来の家族（身内）に逢うでしょう」と語られた世界であり、世間の約束事で結ばれた関係とは別の、〈身内〉という本来の血族への帰属と帰還の願望の世界であった。ただそこは、あくまで世間の現実とは違った時間に生きる世界であり、その世界での愛は絵空事と呼ばれるように、現実の侵食をうけてはならない。それが秦恒平が文学的出発点とした〈身内〉の論理であった。¹⁰それ故に、その気持ちは、六年後に妻と婚約して上京し、結婚をして娘も生まれた現在も、変わることはない。物語の現在は、その十年後とあるから、「私」は東京に住む二十六、七才のサラリーマンであり、慈子は「私」と同じ大学に進み、卒業論文に「日本古瓦文様の意匠史的考察」を選ぼうと思っている大学二年生か三年生、十九才と推定できる。

前年の六月、朱雀先生は四十六才の若さで世を去った。墓参のとき、「みんなに死なれて——」と絶句したお利根さんの言葉は、複雑な家系と「遠い〴〵はからい〴〵」を経験したうえで言われたものだが、「宏に逢いたかった——」と

いう先生の遺言を知った「私」も初めて実感として〈死なれた〉ことを思った。作者の言によれば、『畜生塚』は初めて「身内」という私なりの認識を表現していた作品」であり、続く『慈子』は「生まれ・死なれ」という私なりの発見を加えた」（湖の本^① 畜生塚・初恋の「作品の後に」）作品だったと解説されている。『慈子』は、まずは多くの係累に死なれ、その死を背負って生きなければならぬ運命の人の物語と言えらるだろう。

さて、朱雀家の本家が東京世田谷の下深沢にあつたため、慈子は時々上京して、「私」と密会する。「私」は、当然のことながら「妻と私、慈子と私に、重なり合わない別世界がある」と気づいていて、その秘めた絵空事と呼ばれる時空は、脆弱なもので、現実の侵食を受ければたちまち解体するという怯えを感じている。それは「迪子さんはこの頃おげんきですの——」と、突然慈子が妻の名を口にしたとき、「私」が思わず感じ取るものだが、同様の怯えと焦燥は慈子にもあることは、そう尋ねた当人の「慈子の眼は光って、幽かに焦ら立つてさえた」の場面に窺い知れる。いま、絵空事の世界と現実世界が対峙し、きわどく均衡を保っているのである。

物語の進行は、先生の遺した言葉に誘われ、また慈子の依頼もあつて、主人公は東大の図書館などで精力的に文献にあたり、「徒然草」の成立考について調べ始める。その途中、まず注目されるのは次のような記述であろう。

周到に読めば「徒然草」全般は兼好その人を解説して余すところがない。だが他方、兼好の筆が入念に何か大切な部分を隠そうとしていることもある。（略）意識してああいう形式で兼好個人の秘めて憚りある感懐を表出したものと私は考えはじめていた。小説は絵空事という考え方を兼好はまさしく逆用したのではないか。

〴〵いでや此の世にうまれては、ねがはしかるべき事こそおほかめれ」と叫ぶように兼好が書きはじめたのは、人

の生まれにまつわる品性階級の高下に対する批判だった。

端的にいうと、兼好はこの身分の高下をかなり強く意識した人であり、彼自身の出家遁世にしても真の入信に依るより、僧という身分に出て却って世俗の階級を外へ超えようと願った形跡がある。

興味深いのは、兼好について述べながら、これら二点、すなわち物語の持つ重層性（表層と深層が関わり合いながら意味を醸し出す構造）、および歴史的身分制度（差別）への批判など、そっくり作者の創作手法や動機の自解と重ねて読むことができることだろう。秦恒平の作風は初期、私小説的手法を使いながら、それを逆手にとつて一種の非日常世界を創造するものであった。（〈当尾宏もの〉とも呼べる一連の私小説群は、事実と虚構のあわいに真実を隠し、また巧みに表出し、本当か嘘かわからないように描くことを特徴とした。作者自身も笠原伸夫との対談のなかで、「その方法を丹念に逆用すればするほど、思いきつたフィクションが可能だし、私小説風に、本当のことと思われれば思われていいような書き方をすればするほど、かなり思いきつた嘘が書ける、と思ったのは事実ですね」¹¹と、自覚的な手法だったことを明言している。

「私」は、兼好が「徒然草」を書いた動機を次のように考える。第二十四段の前半にある（斎王）に注目し、それは後宇多院の第一皇女奨子内親王であり、若き兼好は彼女に心を寄せ、「貴女中の貴女として」念頭におきながらも「叶うまじき思慕であつた」こと、また延政門院一条は主君である堀川具守の愛人であり、その許されぬ人との失恋を嘆いて出家したのであろうか、など（兼好失恋説）に思いを巡らす¹²。加えて、兼好の兄の死、延政門院の死など、さまざまに痛ましい事件が重なり「哀悼と無常迅速の感懐をこめて徒然草の筆を執りあげたのではないのか」と推理する。そしてその背後に「絵空事とはいい切れない現実感がある哀しみの漂った印象」を感じ取り、「失せることの

なかつた青春時代の劣等感の息づかい」を読む。それはまた先生がなぜ、徒然草の成立考に思いをめぐらしたのかという問題と関わっている。詳しくは、後章でお利根さんが明かす慈子の両親の複雑な家系の説明を待たねばならないが、家系を継承するなかで自死へと追い込まれた慈子の母肇子の存在も、やりきれない現実として、重みをもってくる。

また、先生のメモにあった「従者の眼」については、「追慕」や「女への敬愛」を全面に出し「聡明で多感な青年兼好の内なる哀しみにもはつきり関係のある所で、この哀しみを汲みとらねば兼好出家に至る人間劇を洞察することができないであろう」と言い、「従者の屈従する視覚を超えて自立する一つの『魂の眼』を願った兼好のものがきである」と、兼好の厳しい身分社会での立ち位置にも言及している。野呂芳男の言う「秦氏の反骨の精神が垣間見えて」と言う一節と響き合うものであろう。そこに醸し出されるのは、絵空事とはけつして言えない現実の、身分制度ゆえの叶えられない恋情と哀しみとも言えよう。

このように、「徒然草」を解釈していく過程は、「私」と慈子の現実との関わりようと絡めて進められていく。この関わりを読み解くことが、作品の奥行きをさらに増すことになる。すなわち、福田淳子が、この複雑な関係を明解に「利根に真実を聞くことで兼好と奨子内親王、光之と肇子、更に〈私〉と慈子を同線上に結んだ」と指摘するところである。福田は次のようにも言う。

慈子を現実に晒すことを嫌って守ろうとする〈私〉もまた、〈慈子〉という斎王思慕を抱え持った。劣等感という言葉では括り切れない共通の哀しみを心に秘め持つ、兼好・光之・〈私〉が一つに結ばれると同時に、愛憎劇には発展することのないそれぞれの〈特殊な三角関係〉が浮上し、兼好の奨子内親王、光之の肇子、〈私〉の慈子という重なりが明らかになるのである。

鮮やかに相互関係を浮かび上がらせた指摘である。ただ「私」が「霸王思慕」という性質のものを抱いていたか、また劣等感に似た「共通の哀しみ」を共有していたか、については些か懐疑的である。つまり「私」の特徴は、終始、優柔不断のように見えながら、自分の現実生活を崩そうとはしない強靱な意思をもっている。だから一層、慈子の愛が切なく哀しく見える効果があると思われるからである。ともあれ、時空を超えたこの愛のありようは、いくぶん歪んだ愛とも言えようが、この難解な作品を貫く主旋律となっている。次に、彼らの背後に渦巻く呪縛からの脱却を試みる「私」と慈子の生き方を検討したいと思う。

(3) 慈子の揺らぎ——物語の拘束力——

野呂芳男の指摘にあった、二つ目の「当尾宏・朱雀慈子の織り成す人生絵模様」について考えてみたい。上述のように、妻子との現実生活と対峙するかたちで、慈子との愛の世界が共存する。不倫だとか男の勝手な夢想だとか言うまえに、作者はこの「イデアルな世界」を現実には晒されない至純な愛の世界に仕上げようとしている。しかし現実はどうであろうか。端的な一例として、保津川から嵐山に遊んだ二人が「嵐峡館」で休憩をとる場面を見てみよう。

湯ぶねに沈ませた慈子の向うむきの優しい肩から背が思いのほか小さくなめらかに光っていた。首すじの白い鬢りの向うに、湯だつけむりににじんで対岸のみごとな山々が、瀬の音を溪深くにたたえながら緑一色に、重なり、ひしめき、もみ合って、広々と怒いっばいに明るく迫っていた。ちからづよく撓う緋鯉のかたち、鮮やかに水をはねる遠い響きを伴ってまばゆく眼の底を染めた。

美しい物語を書こうと企てた作者の意気込みが伝わってくる自然描写だが、(重なり、ひしめき、もみ合つて) (ちからづよく撓う緋鯉) が (鮮やかに水をはねる) 光景は、慈子の肢体の動きであるかのような錯覚を誘う。というのは、すぐ後の「あの万緑一頃の花々に見下ろされた湯ぶねの中で、慈子を肩から抱き寄せた。日光に澄んだあたかな縞目が揺らぎ、白い脚が流れるように伸びて湯ぶねの端を蹴ったのを忘れはしない」の一文と呼応しているからである。

それにしても、「嵐峽館での慈子の『提案』は思い出しても平静なものだった。たのしそうな調子でさえあった」と記される、(提案)とは何をさすのか。その「突飛な提案」を、「私」が「不謹慎と咎める気もちを幾分かは私自身が抑えつかなかつたであろうか」と問い返されるとき、提案の内実は不謹慎といふべきものであつたはずで、そこから自然に導き出されるのは、慈子の方から肉体関係を求めたということだろう。それは(イデアルな世界)から(リアルな世界)へ慈子が踏み出す第一歩であつた。その欲望は「私」にも否定できないものだったと記されるが、注目すべきは、「私」は慈子の誘いを受け入れたという、いわば受身の姿勢で表現されている点である。どこかしら言い訳めいた、責任のがれに似た物言いに見える。これは「絵空事の世界」を守ると言いつつ、実は「現実の世界」の安寧をねがって、慈子と一定の距離を置こうとする心情に因っている。その距離を保つために、無意識のうちにも「私」は受身の姿勢を取ってしまうのだ。現実生活を脅かすものとして迫ってくる慈子の影から、遠ざかるように、「私」は「徒然草」に没頭する。その心境は次のように述べられる。

危うい調和、妻と慈子との中に立ちふさがり互いに言いさせているだけで得られる調和というべきであつた。妻は慈子を知らないが、慈子は自分が妻でないことを知っている。妻を守る論理かと思つたものが、妻を誣うる論

理であるのかもしれない、守る謳うるいずれにせよ、論理を喰い破るちからが動いてリアルな世界とイデアルな世界とが相侵すことになってしまえば破滅だ。

慈子を女として抱き、そしてもっとしっかり抱きたいと思うようになった時、私の世界にはあやしい翳がさしていたといわねばならない。誰よりも何よりも、あの慈子への欲望を飾るための誘惑の哲学を私は大切に育ててきたのだろうか。当の慈子がもしそう私を告発することがあつたら、劫火に焼かれて墮ちる私は醜悪なメフィストフェレスを演じるばかりか、妻も慈子も、つまりリアルも、イデアルも元も子もなくなるのだつた。

いわゆる「不倫」と呼ばれる関係に漂う、後ろめたい背徳の影もある。けれども「私」の不安はともかく、作者は「私たちのこの現在と全く同時同所に別世界の存在が重なっているかもしれない」という魂の「無限の併存」を説いて、二つの世界の衝突と崩壊を回避しようとする。慈子を現実には「雪消えのように失われて」しまう。そうかと言って現実における恋人や愛人という関係になれば、もはや「来迎院」の慈子ではあり難いのだ」と「私」は思う。そうならないためには、「二人が克ち抜くか、二人ながら消え失せるしかない」というのは、いかにも危うい。つまり現実的ではないのだ。「私」にとって慈子は、あくまで「来迎院」の慈子でなければならぬ。言うまでもなく、それは絵空事の世界に慈子を封じ込めることであり、「私」が守ろうとするのは、現実の妻や子であることは明白である。

表現を変えれば、慈子は「私」によって、あるいは物語によって、絵空事の世界に拘束されると言ってもよい。しかし、慈子はもはや「私」の夢に付き合っていない。ためらいながら、現実を愛を求め、自立しようとする女性

に変貌しつつある。いかに背後に複雑な家系の事情があるにせよ、また作品の意図が、お利根さんのように「遠い、深いはからい」に従って生きることを強いるにせよ、慈子はいま現実世界に生きることを望んでいる。そのために、自ら肉体関係を「提案」したのだ。この現実で、すがり頼れるものは「私」ひとりである。(来迎院の世界に住むこと)と(現実生きること)の間で、慈子のこころは揺らいでいる。物語に抗って自立する意思が芽生え、お利根さんの遺書がその後押しをするかに見えるが、苦境に立っていることは事実である。衝撃的な例として、慈子が「私」の子を流産する事件をあげてもいいだろう。慈子の意思に反して、現実には「私」の子供の存在を許さないのである。

そのとき「私」が考えることは、些か心許ないものである。流産という事実は受け入れるとしても、「自身に問いかけねばならぬことといえば、それを悦んでいるのか哀しんでいるのかであった——」と戸惑い、毅然として病院から帰っていく慈子を見ながら、「慈子と私との間に超えがたい現世的不毛の拵がるらしいことを、血の色がはじめて私に教えた。二人して生むべき子に今の今死なれた親は、虚しく路上に声を失って別れねばならなかった」と記される。さらに「私」は「慈子はどうするのであるか」と思いながらも「一度も、自分はどうするのであるかと考えないでいることに気づいていた」。絵空事の世界が現実と交錯して倒壊しようとするときに、「私」にはもはや「絵空事に絵空事にしかない不壊の値がある」と言えるような凜とした姿勢はない。(身内観)を語る資格も「私」にはない。慈子はもう解放されてもよいのである。

しかし、物語の枠組は、来迎院の世界(慈子が背負わなければならない宿命の世界)へと慈子を引き戻さずにおかないようである。

慈子の母が最期に洩らしたあの、深い遠い、はからい、が安らかな本質的なものであるなら、慈子は私へ結び合

わされたことを父や母の有り難い遺産と考えたいのだった。慈子は私と離れがなくなっていた。お利根さんの死によって父のことがもう捉えようもないほど巨大な波になって慈子の中でうねった。先生と私とが慈子の中で一つに重ね合わされていったし、そのことでこそ慈子は、父が世に赦されない以上はきつとお兄さんも人に赦されないだろうと思いい当てたのである。(傍線引用者)

来迎院の存在意味を考えると、父や母やお利根さんだけの世界だけではなく、慈子や「私」に関わっていることに気がつく。その背景に、父の死後、慈子は朱雀家から淀屋家(利根の家系)を嗣ぐことになり、淀屋老人から、朱雀家が代々続いた公卿の家だったが「安政大獄の頃にそれとは無関係に、何かしら内輪のもめ事のあと病いだたりがして絶えたんだそうだ」と聞かされる。父の話はまったく出ることではなく、「そうなのか、父はそんなにも人に赦されていなかったのか——と痛感する。何故にそんなに父は疎じられるのか。慈子は不審に思う。

まず、傍線部にあるように、大きなうねりのなかで、本来のありようとして、「私」と慈子は結ばれることになっている。光之と肇子が、兄妹でありながら純粋な愛から慈子を生んだように、そしてそれが原因で自死することになるうとも、世間の関係性から乖離して至純の愛は存在するという考え方である。しかし、なぜ「先生」と「私」が重ね合わされるのだろうか。その解釈の糸口として、漱石の『こころ』における「先生」と「私」の関係を参考に考えてみたい。

『こころ』の先生の遺志は、自分の死後、残された奥さんと「私」が〈共生〉することを望みながら、それを明らかに書き表わすことなく、読みの領域で可能な解釈であった。それに対して、『慈子』の先生の遺志は、死後、慈子と「私」が結ばれることを望んでいた。それは、お利根さんが語るなかに、二人の将来の関係について「自然とお父

様のある確信は固くなってゆきました」とあつて明確に推測できる。『「こころ」と決定的に異なるのは、その（結ばれ）が現世のものでなくてよいと自覚的に認識されたことだろう。両方に共有されるのは、「先生」＝「私」という等式であり、「私」が「先生」のまえに出現したときから、「先生」は「私」に自身自身を投影させていた気配がある。お利根さんの「あなたをみて、あなたの少年らしいむきな所や、どこか寂しく大人びた所を先生はご自分のもののように想われていました」という部分もその一端である。秦恒平の解釈では、『「こころ」の先生は、「死んで」「私」に化り変り、「妻」と「俱生俱死」の本望を生き直す』ことになるのは、先の引用に見た通りである。

だから、残った者に、妻や娘を託したい気持ちは同じ心理構造ではなかったか。そして託される者「私」は、託された者「慈子」にとつて、託する者「先生」と等しく見なされたということではないのか、と推測される。

では、朱雀先生の罪とは何だったのか。慈子とお利根さんと三人で、京都の来迎院に來住するようになって以来、物静かに人生を送った先生の過去とはどのようなものであったか。お利根さんが語る第三章から簡単に概要を見てみたい。

朱雀光之の悩みは自分の出生にあつた、とお利根さんは言う。元子爵の朱雀謙之と麟子には子供がなく、謙之の妹と田倉繚の子である光之を養子とした。ところがその後、麟子に子供ができ、肇子と名付けられ、光之の五才下の妹として仲睦まじく育てられた。肇子と仲のよかつた利根は光之の従兄妹に当たり、三人はよく行動をともししたが、肇子連れずに光之が京都奈良に遊んだ折り、居合わせた利根は肇子への羨望・嫉妬から、出生の秘密を口走つてしまう。それを知つた光之は朱雀家を嗣ぐのは肇子であるべきだと思つた。

幼い頃から、病弱で、肋膜炎や結核などを患つていたが、昭和十六年、胃の具合を悪くした光之は、房総の勝浦へ療

養に行っていた。その地から肇子に手紙が届いて、「ぼくはお父様の本当の子ではなく、お父様には甥でお前には従兄妹に当たる」こと、「朱雀の家をお前が嗣がないといけない」ことが記されてあった。ちょうど肇子には切迫した縁談があり、利根に相談に来たときの顔は蒼ざめていたと言う。事件はその二年後に起こった。「この肇子さんが妊娠なすつたことをご両親に打ちあけられたのです。肇子さんと並んでお兄様が頭を低れておられました」。光之は謹慎のように朱雀家を出され、肇子は秋に慈子を出産した。その後まもなく、利根に慈子を託して「短剣を胸に突き立て」自死してしまう。肇子はこのように語り残している。

あの方と自分とは兄弟でも従兄妹でもあり、また恋人同士で夫婦でさえあったのだけでも、今、こうして私たちの娘の顔をのぞき、遠くを流れる潮の響きを聞いていると、こういういろんな現在での関係とはまるで違った遠い昔からの配慮というかはからいというか、血でも約束でもない結ばれの深さが感じられて、あふれそうな恋しさ慕わしさもその深みに戻って直接に感じる時、ああこの世のことなんか何だっというんだ、自分は一番いいことをしてきたのだ、あの方とは絶対に一つなのだと思わないではおれない、と――。

人間関係の究極の〈結ばれ〉の深みと愛しさである。この作品を底流する思想だと思われる。宗教的ですからある、と野呂が指摘し、自殺を美化する作品ではない、と評する所以だろう。ここには、魂の「無限の併存」を説き、関性を超えた愛の普遍性への志向があり、〈真の身内〉こそが感知しうる夢想に近い「血でも約束でもない結ばれの深さ」による絶対の愛のかたちが示される。しかし、近親相姦に似たこの禁忌を超えた愛が、先生の生涯背負わねばならない罪であった。謹慎のように朱雀家を出された先生は、死後も実家に迎えられることなく、物静かに思索しなが

ら、四十六才の若さで逝く。

慈子は、このような、お利根さんが語った父母の遠い由来の（はからい）の呪縛を実感し理解しつつ、それでも後に続く利根の自死が、その呪縛から自分を解き放つ行為であったことを知る。なぜなら利根の遺書は「慈子は生きてゆく者であり、死ぬ日とでもっと別の意味で新しい死を選んでほしい」と望み、自分を「死なれた者の最後の死」と定義したからである。実際、淀屋の家では慈子をアメリカに留学させる話も進んでいた。しかしこの留学が二人の別れの契機になる恐れもあるので明確な返事ができない。この新しい出発においてすら、慈子は来迎院の世界と現実のあわいで揺らいでいるのである。流産した「すでに生命絶えた生まれざりし者のために」慈子は、主人公の一字をとった「朱雀宏之」という命名をせがみ、「みんなと一緒に住んでいますわ。私たちを待っていますわ」と、別の時空でその子と「私」の結びに拘泥している。

最後にもう一例を見てみたい。末尾である。日本橋高島屋を家族連れでおとずれた主人公一家のまえに慈子があらわれる場面である。

高島屋のぞいてくるつもりさと朝の電話を切った時も、「そうなの」と言葉すくなだった。慈子の眼は私をさがしていた。ハンドバッグが不安げに揺れ、胸へあてている手がとても美しい。呼ぼうとして、はっと口のなかで慈子という名が凍えて消えた。もうみつけたのかもしれない、慈子は一度人かげに隠れながら動いていた。表情と胸騒ぎとがきしって裂けた。頬から寒く、はつきりとそれが分った。潰れたうめきが咽喉に絡んだ。身を翻して、走った。足がすくんでいた。

「ひどいわ——」

私はそう聞いた。慈子は、あかくなつて、低声でもう一度可愛く同じことをいった。急に私を見失つた娘が大
声で叫んでいた。パパ——と叫びながら娘はかけてきて手を把つた。慈子は掌で口を抑え、みるみる血の気を
失つていった。女面の前から妻がゆっくり振り向こうとしていた。

来迎院の世界が、現実をまえにして、脆くも倒壊するように見える。このあと、慈子はどうなるのだろうか。それ以上、主人公はどういう行動をとるのだろうかと思う。おそらく「私」は、妻が慈子を認めるまえに素早く長女の手をひいて妻のもとに戻るのだらう。無残にも慈子はひとり取り残される。それが物語のもつ拘束力であり力学である。現実からの鋭いシツペ返しを受けて慈子はうずくまり暫くは立てないだらう。小森陽一は、この末尾について「慈子はその「絵空事」の「愛」を、現実の生として選びとろうとして」「父、母、お利根さん、あまつさえ自分の子供の死をも背負つて、死なれた者の生をただひとり生きつづけなければならぬのであつた」と的確に分析している。夢から醒めたような「私」の裏切りの前に、慈子の哀しい愛は行方を見失つてしまふのだらうか。あるいは、今度こそ、まったく別の時空で、〈真の身内〉として二人の愛は固く結ばれるという魂の遍在論は意味をもつのだらうか。作品は問いかけてくる。しかし慈子は、たしかに小森が指摘するように「いまはなき人」ゆえにイデアルな世界に自己完結的に生きる女たちの面影が投影」されているとしても、福田の言うように「絵空事」の愛を選択したとしても、慈子はいま、死者たちとそれを語る人たちの呪縛を受けながら、絵空事の世界に封じ込められることに、躊躇し、抗つて生きていこうとしている。

だから、慈子の愛は、そして「私」の愛は、消えてしまふことはないだらう、と読者は考え始めるのではないだらうか。うずくまっていた慈子は、やがて静かに身を起こし、毅然と立ち去るだらう。ちょうど流産の後、見送りを拒

んで病院を立ち去ったように。それが物語の復元力である。そのために、作者は兼好の「徒然草」の成立について考
え、(身内)の論理や魂の遍在を説き、「先生」とその父母にまつわる複雑な家系のなかで筋を通して生きた肇子やお
利根さんの自死を描き、「私」と慈子の愛の物語を延々と書き連ねてきたのである。

(注)

(1) 小森陽一『「こころ」を生成する『心臓』(成城国文学)昭和六〇・三)。のち『文体としての物語』(昭和六三・四 筑摩
書房)に収録された。引用はこの書に拠る。なお、一章において、それぞれの論文に発表年月を付したのは、影響関係を
明らかにするためである。

(2) 秦恒平『死なれて・死なせて』(平成四・三 弘文社)

(3) 柄谷行人「自然と意識」(『畏怖する人間』昭和四七・二 冬樹社)

(4) 注3に同じ。そのなかで「自然」の概念を説きながら、「これは『それから』の代助が、「世間の掟と定めてある夫婦関係」
より「自然の事実として成り上がった夫婦関係」の方が正当なのだと同じことである」と記している。以下の柄
谷氏の引用はこの書に拠る。

(5) 三枝和子「『聖書』の話」(『文学界』平成九・一二)

(6) 岸田俊子『「こころ」に広がる意味の余白』(平川祐弘・鶴田欣也編書『漱石の「こころ」どう読むか、どう読まれてきたか』
平成四・一一 新曜社)

(7) 注3に同じ。

(8) 野呂芳男『慈子』解説(昭和五三・一二 集英社文庫)。以下、野呂氏の引用はこれに拠る。

秦恒平「慈子」論ノート―揺らぐ慈子―(永栄)

(9) 「畜生塚」〔新潮〕昭和四五・二)

(10) 拙稿「秦恒平『隠水の』愛」〔文藝空間〕九号 平成五・一〇)、および「秦恒平「初恋」論——連鎖する面影のなかで」〔皇學館論叢〕第四一巻第四号 平成二〇・八)を参照されたい。

(11) 秦恒平・笠原伸夫「対談『罪はわが前に』をめぐって」〔『罪はわが前に』昭和五〇・九 筑摩書房)の折り込み別冊。

(12) 福田淳子「秦恒平「慈子」論」〔文藝空間〕九号 平成五・一〇)。福田氏はこのなかで、秦恒平の文学の特徴である、絵空事や身内観について詳細に検討しながら、「徒然草」が「慈子」のなかで果たす役割についても、丁寧かつ適切に分析している。以下、福田氏の引用はこれに拠る。

(13) 小森陽一「秦恒平・「慈子」の慈子」〔国文学〕昭和五九・三 臨時増刊号)。

〔付記〕漱石の「こころ」の表記に関しては、それぞれの著書・著作での使用のまま用いた。

(ながえ ひろのぶ・日本近代文学会会員)